［別紙２］

論文審査の結果の要旨

氏名　平野　聡

本論文は、清朝中国の政治統合に関する従来の諸学説を批判し、チベット・モンゴル、さらにトルコ系ムスリム等の統合様式に着目することによって新たな解釈を提出し、現在に至る近代中国の深刻な「民族問題」成立の淵源を解明しようとした大作である。

「中国」を、漢民族とその漢字や儒教を軸とする文化とを中心とした統合だとする見方がこれまで有力である。しかし、それでは、何故、朝鮮や越南が近代中国の一部にならず、逆に、漢字も儒教も共有しないチベット人・モンゴル人の住む広大な地域が、「中国固有の不可分の領土」の一部とされるに至ったのであろうか。それは、単に清朝の軍事力による支配地域拡大とその継承というだけでは説明できない。清朝時代、特に１８世紀には、チベット人・モンゴル人・トルコ系ムスリムからもその正統性の承認を得た統治がかなり安定的に成立していたからである。それは、皇帝が、漢人に対しては儒教的天子として立ち現れ、チベット人・モンゴル人に対してはチベット仏教の擁護者として立ち現れたというだけでも、ムスリムをも含んだ大きな統合を説明できるものではない。では、いかなる統合だったのか。そして、それは如何にして崩壊していったのか。本論文は、その解明の試みである

「序章　チベット仏教と清帝国…歴史的連続と断続から」は、清帝国がチベット仏教を一種の国教とし、それ故にチベット人・モンゴル人も皇帝の権威を受け入れるという清朝盛期の関係が、清末には清帝国自身によって覆されたことを指摘し、世界に幾つかの例がある前近代の帝国が崩壊して「民族問題」が発生する過程としても独自の性格を持つことを強調している。

「第一章　『中華世界』論再考」は、漢族を中心とする「中華民族」なるものが永く実在してきたという新奇な観念が、二十世紀初頭の日本の「東洋史学」の「中華世界」像と対応して形成されたこと、しかも、その後の外国の研究者等が「中国」を内在的に理解しようとする余り、漢族からの視線に沿って歴史を理解する傾きのあったことによって補強されたことを指摘し、「中華」尊崇意識の無いままに密接な関係を持っていたチベット・モンゴルを視野に入れた清帝国像を描くことの必要性を主張している。

「第二章　清帝国とは何だったのか…批判的再考」は、従来の諸研究を批判し、盛期の清朝皇帝が仏教を保護して世の安寧と繁栄をもたらす「転輪聖王」としてあったことを単にチベット人等を懐柔

する策略であったとするのは不適当であること、東南方面には北京を首都とする儒教的「天子」として、北西方面には承徳を首都とする「ハーン」としてそれぞれ君臨したという二分法でも割り切れないことを指摘している。そして、「満洲人たちの部族長会議の議長と、モンゴル人たちのハーンと、漢人たちの皇帝と、チベット仏教の最高施主と、東トルキスタンのイスラム教徒たちの保護者という、五つの役割」（岡田英弘）を矛盾することなく結合させる、より高次の自意識・世界観があったのではないかと示唆している。

「第三章　質朴と華美・武勇と文弱…雍正帝の反華夷思想論」は、その示唆の実証の試みである。そこでは、高度の専制権力を確立した雍正帝に着目し、彼が想定していた、「武勇」に優れ「華美」に流れぬ満洲人の皇帝が、「教」や「俗」を異にする多様な諸民族を平等に統治する「中外一体」構造（それはむしろ華夷思想に反する）を、彼自身の著作等から再構成して示している。

「第四章　清帝国の統合における『教』と『淫祠』」は、「中外一体」構造が儒学者にもたらした思想的ディレンマと、一方で皇帝が陥った、上下秩序の重視とチベット仏教の活仏等への拝跪の必要とのディレンマとを分析し、さらに苗族統治を例として、「教」と「淫祠」との弁別の不安定性を示している。

「第五章　堯舜に並び超える『皇清の大一統』――その光と陰」は、儒教・仏教・イスラームはいずれもその教化が全世界に及ぶことを志向するために相克の可能性を持っていたこと、そのため、そのいずれにも深入りせずに「その人の道を以てその人の身を治めさせ」、公正に「安寧」を維持する武力として皇帝権力があったこと、しかし、満洲人・モンゴル人の武勇と軍事組織の弛緩によってそれが揺らぎ、「皇清の大一統」自体が危うくなっていったこと等を指摘し、その例として十九世紀初頭、英国の攻撃に対抗するための朝貢国ネパールの援助要請を拒絶した経緯を詳細に分析している。

「第六章　『自治』論の時代――十九世紀前半のチベット論」は、十九世紀前半のダライラマ政権によるチベットの高度の自治が、チベット仏教という「教」による安定として、清朝政府自身からも肯定的に捉えられていたことを指摘し、それが「藩部」統治の放棄でもなく、チベット「独立」の容認でもなかったこと、しかし一方で、屯田論に示されたような儒教の立場からの教化・同化の主張が漢人官僚の影響力の強化と共に強まって状況が不安定になっていったことを記述している。また、清帝国では、特にロシアとの事実上対等な関係等によってそれなりに領域国家としての意識が形成されていたことを示し、それを承けて、西洋の圧迫の下で、「中国」という「主権国家」の領土として「藩部」も意識されるに至ったという経緯を示している。

「第七章　英国認識とチベット認識のあいだ」は、十九世紀後半、

英国がチベット進出に際し、チベットへの「中国の宗主権」を認めたことに対応して、清国側はチベットをその「主権」の範囲内と了解するようになり、一方、頭越しの英国・清国間の交渉の結果の強要に対してチベットが反撥し、新たな世俗の保護者をロシア等に求めるようになっていった経過を詳細に記述している。筆者によれば、チベットの高度の自治を含みこんで成立した「皇清の大一統」がこうして崩壊し、現在に至る困難な「民族問題」の淵源をなすに至ったのである。

以上が本論文の要旨である。

本論文の長所としては、以下の点を挙げることができる。

第一に、本論文は、近年公刊されつつある漢文のもの及び英国外務省文書を含む膨大な史料群を渉猟し、それを基礎として、巨大にして多面的な対象を壮大な規模で解明しようとした力作であり、学界に衝撃を与える可能性を持っている。その主張の全てに疑問の余地がないとは到底言えないものの、今後ここに提出された一連の解釈を無視して、清帝国の統合とチベットを焦点とした近代中国の「民族問題」の成立を論じるのは困難になると思われる。

第二に、チベット人・モンゴル人、さらにトルコ系ムスリムにとって清朝が如何なるものであり、そこに一旦成立した構造が如何にして崩壊していったかを探るという方法が新鮮である。そのために、従来の歴史理解では解き難かった諸問題ーー例えば、何故儒教文化を共有しないチベット人・モンゴル人等が清朝の統治の正統性をある程度安定的に承認していたのか、そして何故彼等の住む地域が近代中国において「不可分の領土」の一部とされるに至ったのか、そしてそれにもかかわらず何故彼等との間で清朝末期以降鋭い緊張が絶えないのか等ーーについて、一応の解答を示しえたことは、本論文の大きな成果といってよい。

第三に、特に始めの三章において先行研究を詳細に紹介すると共にその問題点を大胆に指摘し、その上で率直に自説を展開したことは、一面で論文を長大なものとする結果を招いたものの、研究の在り方としては、高く評価することができよう。

しかし、本論文にも短所が無いわけではない。

第一に、これ程包括的に清朝の統合を論ずるのであれば、統合の理念的側面に加え、現実の統合システムの解明がなされるべきであり、また、同じく非漢民族が形成した元朝との比較がなされてもよいはずだが、それらの作業はあまりなされていない。また、例えば同時代のオスマン帝国の統合との比較がなされ、その共通性と異質性が明らかにされれば、より一層説得力が増したと思われるが、そ

れもなされていない。

第二に、多数の史料を渉猟したことの反面として、時にやや史料の読解に精密さが足りないと思われる部分がある。例えば、『皇朝経世文編』を利用するのはよいが、場合によっては個人文集に収められたもとの文章と照合することも必要であろう。また、一部に漢文の読解において不正確な個所があることも否定できない。

第三に、本文が長大であり、しかも論文全体の構造が必ずしも明快ではないために、図を用いて説明するなどの工夫はされているものの、かなり読みにくい論文となっている。文章にもさらに洗練されるべき余地がある。

しかし、以上の短所は、本論文の価値を大きく損なうものではない。これが、中国政治外交史研究において大きな貢献をなすものであることは明らかである。本論文の筆者は、博士（法学）の学位を授与するに相応しいと認められる。